繪本拾遺信長記 七

へ19
3564
20

絵本拾遺信長記後篇巻之七

目録

鈴木孫市志摩守兄弟降参之事
鈴木志摩石山退城 二条
重幸遠謀破信長事
信長不意に石山を責む 二条
門徒の男女本山を救ふ
勅使到石山事

門 13
號 3564
巻 20

早稲田大學圖書館
昭和 34.6.3 受入
蔵書

信長若江の城へ移る

信長条内

敵如上人英智之事

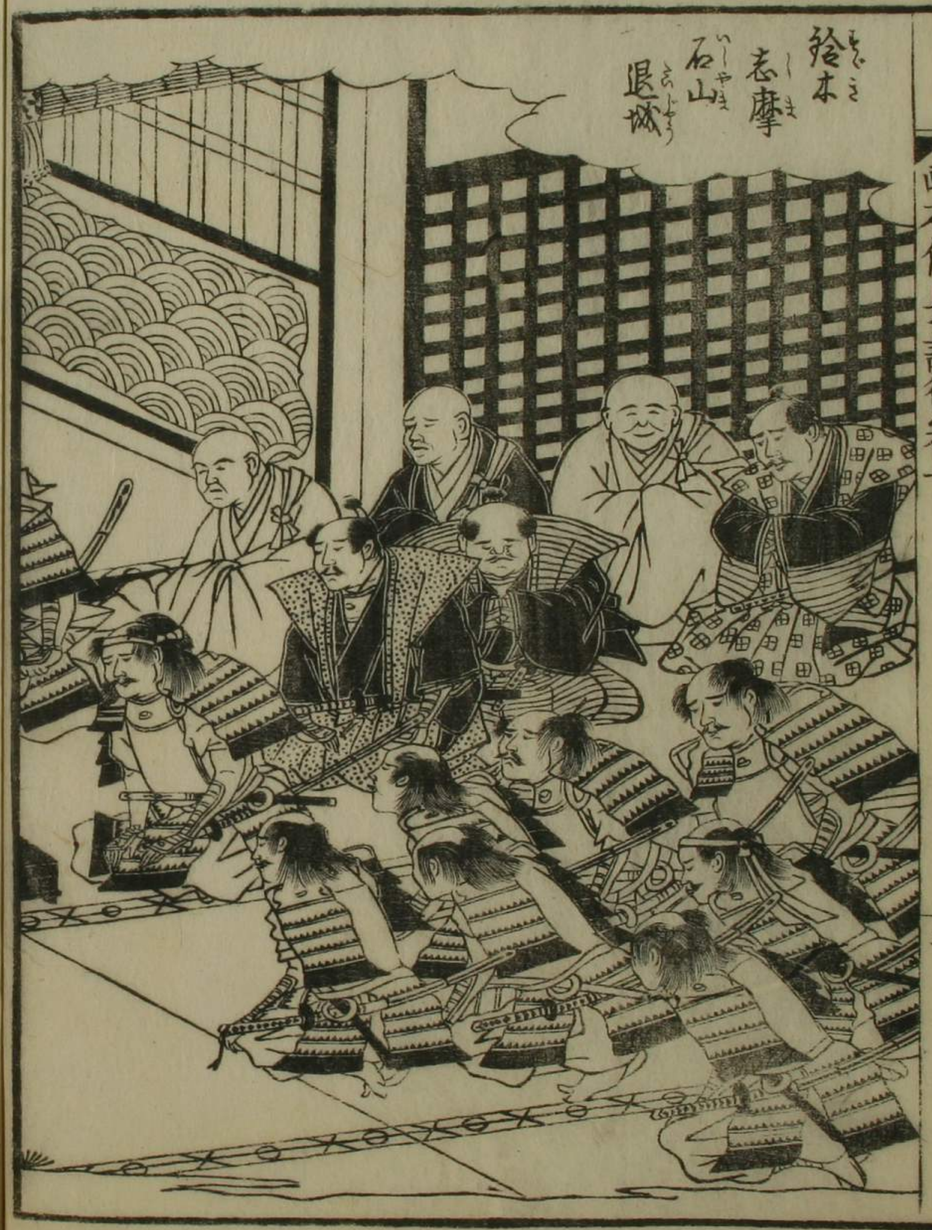
勅使石山へ到る

敵如上人開城

繪本拾遺信長記後篇巻之七

稔本源市志摩与兵郎降参之事

去りとて石山の城中より軍師重奉小清水の合戦へ入り
程石とたのみる勇士根来の小密衆と始めとして八百餘人の
兵卒と共に英気を換ぐるのみならず此後信長大軍を駆さく
表来りいえるべしき防戦も是東なく今い岩山落城宗門退
潮の時節至来りなるかやと上人をはじめ奉せ一城の男女
後の男女なるまぐ歎きうるまざる者もなし附て稔本源市
志摩与兵郎の両人上人の御前へ出て涙ながらに言上しける
い今度重奉小清水の合戦へ参ひ死と逐ひしい源き忠義
とねぐ岩山永久の計ひて宗門繁昌の基なるべきらく


絵本
志摩
石山
退城

御殯儀の仮あるまじくこそなれ人重幸小法名出陣の府よのぞこ
ろ名両人よ遺言の密書と称し雑賀門跡退散の遺計を為
さんとて其遺書の旋い幸懐中よ立て寸謀を紛ひ信長が軍
を破りまづ〳〵糸摂の間よ威を震ふよ似たりと人ども信長い
天下の武将上い天るの補佐とし下い万民よ政を布紛ひ智勇
の臣下数百負個孫の兵士百万あり幸名御方よみて小ぜう
会の勝利を得るい味方始終の勝よたつべいよ〳〵信長の勝
を増長せしめ遂よは雑賀山滅亡せんよ疑ひ及し信長が勝心有
い幸幸方り幸幸奴軍して討死せしと受うば彼が無りの事
と解ぜ且孫市左右郎名と先と紀州の兵士悉く懐を出
信長よ降参と云ふ信長が無りの三分と解ぜ信長が

無りを懐い者い甚危く無りと解い味方の利たり是偏に幸
幸が恩恵よあらべ厚くも宗祖親鸞聖人の霊験よ感じさて
こそ討死を遂ていはしこまぐ書紛してひひ年数尚此後信
長雑山よ来るの方りが防ぎちゆべき謀計策我と称
他人い人い幸幸命の附と同じく心つよく籠城たりせらる府の
ある低結せ給ふ人ぜ且名両人をたづめ紀州の兵幸御名ごり
をしくいひ人ども是より退散仕り幸幸遺言よ依せ信長よ降
参いて外よ交く雑山安寧の名称とめぐりしひ是唯〳〵御
名称こそ変ぜ雑の神を新よ毎〳〵たてさめぐと欲さ
けもば上人いとうの御いらんもう邪悪よむせび泣ひけ
るぞ御痛りきありさまたり元り上人い歓味方の配乙せるを

其二

懇に浄ひいくふもしして信長ゑ蜂りを止めたく人畜山を退き紀国
すく本山を建立ゝもるゝ宗門の義徴ゑ立んやとつゝゑ
合戦をいとひ浄ひ多ば本幸が遠謀憲く御心ゑ叶ひ両人ゑ出
城をも充ゑ発し浄ひ御脇の愛とやさき其日れ後而御系にあり
て蜂奴多義を賜ゝそう其孫朝孫市与に郎紀伊国の兵士三ゑ
余人を率し城を出て雑賀に帰りやゞく後巻をなて信長に降
条の旨報ひるふぞ信長枕れ此後の合戦ゑ石山勢利と失ひ重
幸ゑ討死しる友ゑより今れ叶ふほゞとく降条せるゝ武れ先も
幸幸ゑ遠謀なるうんもるべうゝ先渠ゑ乞ゑ任せくを動静
と慈んと以後歓対をほゞとり紀伊ゑ国利しる生しるれ海ゑ尾
ゑ但せ雑賀表の仕義と報ゝべとやゝ浄ひ孫市与に郎れし

こまり紀伊文と献じ先より信長ゑの幕下ゑ属しゝり

重幸遺謀破信長事

信長ゑれ此折節中国表ゑ御ゑつゞひのるゑ向ゑきのこうゝゞ
摂州ゑ国の城を荒木摂津守村重諸敵して村城ゑ猪籠ゝやゝ
石山本願寺と合体せば勇ゝ強大なるゑりとて討ゑの軍兵と
なさんゝ緩兵急ゑ責させ浄ひゑ石山れ然と折ゝを責ゑけゝる
上人元来重幸ゑ計略のごくいうゝゝ信長ゑ勝ゝと敵じ
宗門本願ゑを祈ゑ浄ひ石山より尚れゝく向ひゞ天正七年
荒木村重勢ひ強さ有国の城を開き尼崎ゑ移り遠ゑ減ゝゑ
拠ゝゞ摂津一国平渇しゝゑゝば年来のうゝゝ石山を責落さんゑ
紀州の浪人とゝゝゑ退城せしゝとい浄ひ重の外ゑに多者いゞゞ

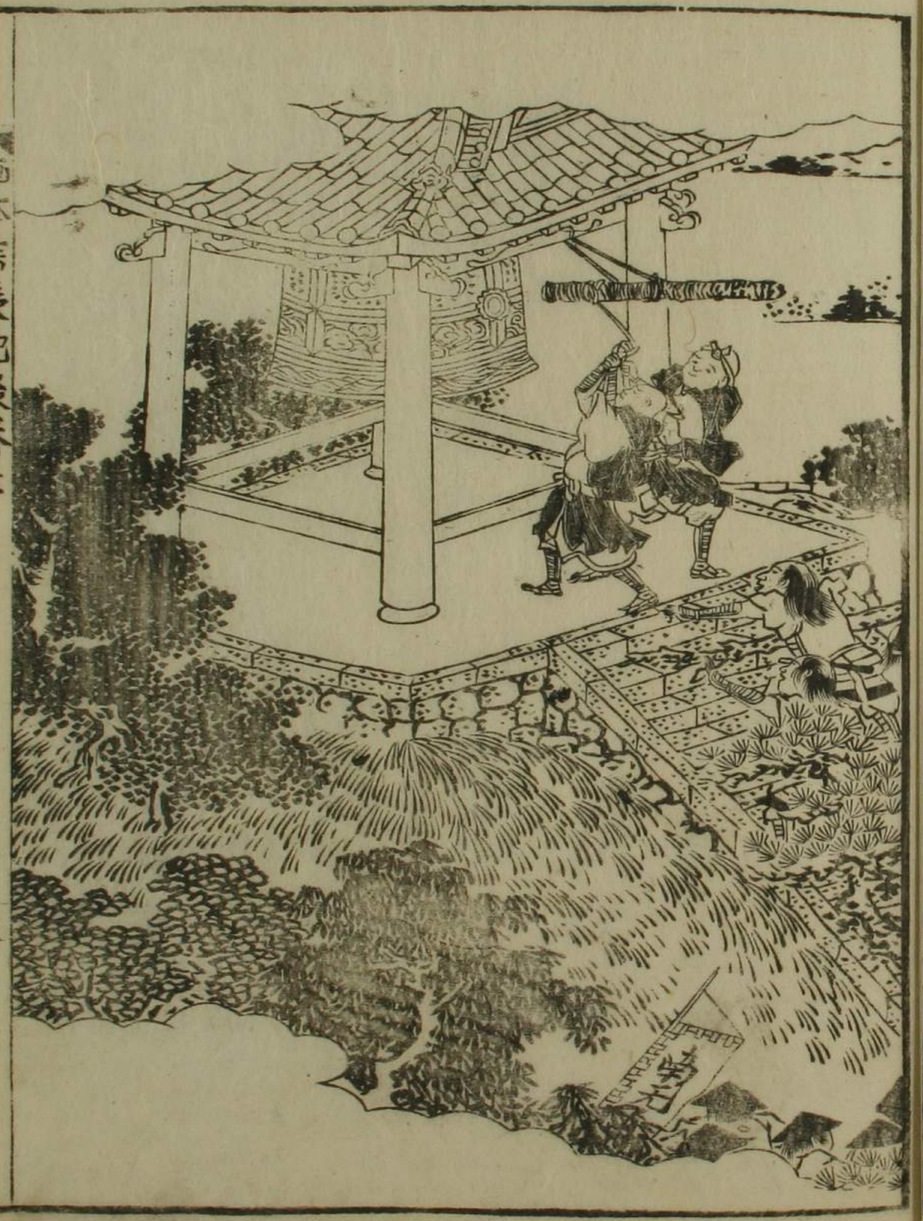
信長
石山を
責む

うづに出一挙に踏ぶ〳〵宿怨と数せんものと二万餘騎の軍兵を率〳〵堺より住吉の陣をつゝ孫石山へ押寄らる此時石山の城中には去年已来信長の焼り〻数〳〵うるゝや当国へ軍馬を出され〳〵附も当山を押ひく別条なれい此後とても乗るまじと安堵〳〵て居うりに織田大軍を出来給ぬ上人と始め城中の衆乗大きに驚き腹々ろなる信長当宗門を破滅させどんい飽るまじ此上い面〳〵宗旨のあ小命を捨んゝ何のゝ細ゝみゞきやと我されゝ獲えてゝげうけ矢倉〳〵に鉄炮の筒先を揃へ精兵をゝらして矢挟のもとにひ〳〵と並居さへ命いきりふせゞ戦へと片唾と飲で待うけう去ゝぬきに知ゝ勇気と孤いし岡の殿山岳を勢〳〵唯一のりと柵際を固

来ゝ公城中には堅固の門徒等に泉命を捨て矢玉を防ぎ〳〵寄と沿とぞ防ぎ〳〵るされども寄人大勢なれば新手と入替指揮をつゞきつゝ柵一重を責破りぬこしをゝく城中よりひく相図や鬨をゝんゝ獲を鳴らすのかう〳〵と其数雲霞の如く石山本願寺の獲い石恩深の名獲ゝて其数い黄獲の旗中と獲遠く郷書〳〵の世に数ゝ納言信西入道の孫あり（今西の条殿藤原の家に部る獲）〻〳〵へ沿西去秦廣隆寺のあり獲ゝ（を一年兵孔のうめゝ）清堂ゝ沿ゝ田孫〳〵久〳〵去中ゝ懐ゝ（を）と遷如上人石山の御堂建立の財産徳去ゝの告夢ゝうゝ掘出〳〵て本願寺ゝ遷〳〵掲させ給ゝ其孫ゝ曰く

夫廣隆寺者上宮去ゝ蹟猛ゝ秦川勝草創ゝ本朝ゝ

其二



佛法爰始此地繁昌被今靈弦等言語道斷事在弟記
不須後說於是久安六年正月十九日仁祠忽逢田孫
之殃住侶空闌寥已之御輦悉靈寺之爲灰唯感弦佛
之兎煙方今佛閣僧院擬種樓純藏悉易基趾新加修復
洪種即作銘曰

鳥氏呈巧　鑄範既成　朱火吐焰　赤銅孫精
雄龍拳首　鯨魚發聲　秋風夕敲　扣霜秋鳴
聞有項上　達無同撞　蓋搖曉至　忘想眠驚
速持三下　利益已生　冥成法器　乾摧操名

少納言信西

此附孫市志摩与已郎の両人い信長の幕ちに屬しゆ知る時よ

仲よりてうせども心中ふは石山の守護さらふ怠りなくゆゆさく
重聖ど遺書の計畧ゆまうをあるの門徒を語らひ懷住吉
平地小坂に獲兵八ケ所天満の森福島川分口の所くよ三百又
百を分ち深く兵信長不附よ石山城へ立うらび相図の狼煙
とあげて諸方の門徒ら付合せて防ぎ支べさ命ゆ知しけ
きばうのきうせのよ強とゆ名し男女老少のきこひうく
武い行鎗ゆるひいかくさか外美種引さげてうけ出せど老
うる女幼こさ見るとゞも我劣らじと陸ひくこ已ゲ宗門の強敵小
田信長拘ゆうて拓き殺せよとく我もくと加勢と已に隅へ
面門後の獲兵雲のごとく紀里を問を姫り鉄炮と鄉書せ松
明のひうり天よりやき喰きり呼んぐ巷よとれが小田の大軍

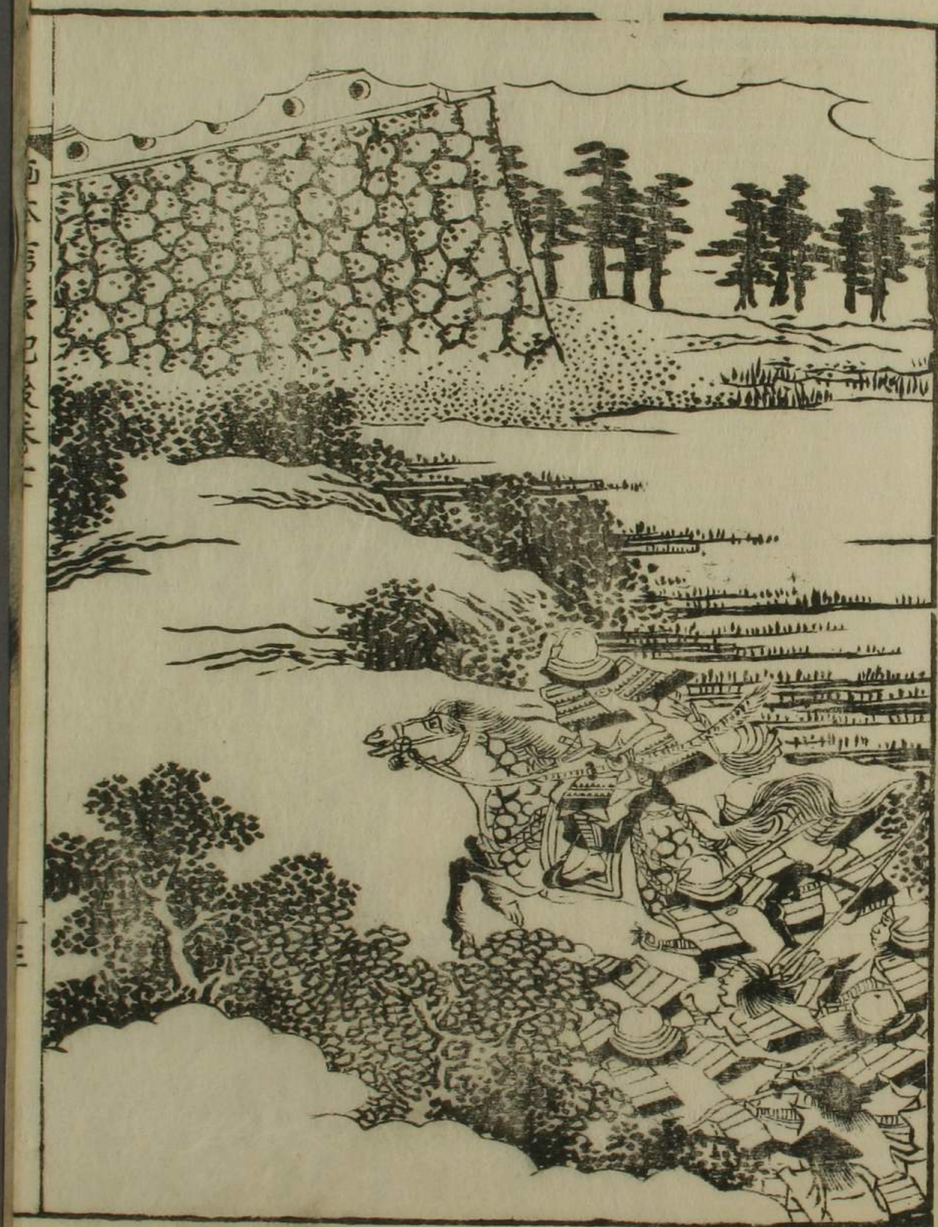
門後の
男女
本山を
防ぐ
なむあみだぶつ
南無阿弥陀仏

大きゝ小驚きといや門後驚の例の伏兵に出あひ〳〵きつよあ
まんより引やくとつゝみてごとそはを馬りの具も打捨てまう
はの方へ這くゝ逃ゝうる大ね信長も無驚の崩を逃るゝ詮
方なく心ちゝびし若江の城へ引入給ふ

勅使至石山寺

扨も信長云る殺年の合戦ゝ石山を攻るの強ひ剣へ戦ゝ毎ゝ
勝利ゝ方くゝ見ゝ引き敵軍のゝ〳〵ゝ向本願寺をゝくゝ法ひ
天正八年の正月ゝ浦ありて勅奏に就く奏聞ありゝるゝ抑
信長石山本願寺と合戦年と来るの王城近く戦と震
朝廷の怒をおるゝ〳〵とゝ〳〵も色々私の賂りにあゝび信長
石肖の多るゝ諸国の勅使を強伐〳〵七道と平げ王城と

結ち奉るの功ゝ高官ゝ叙せゝを希代の朝恩を蒙り
ま叙信長感悦をゝげまに涙をゝ流せんゝと欲〳〵粉骨砕身
して城後を討る向ふ不敗〳〵とゝ〳〵ゝ
色しゝ今く勅宣の来きゝと信ゝ既ゝ載くゝ乱方り乱る小石山
本願寺の門後ゝ勅命ゝ宵き敵下和に後ゝ信長ゝ歓対
応に勅ゝ遅い天るゝ男と引く朝歓ゝ〳〵〳〵て何ぞや
信長ゝて石山の地ゝ一城と築き西国の逆後を押へ震襟を
泰山の安ゝる長ゝんと計るゝ小倩後の刃として国の費へ民
のゝ苦しゝをゝくゝ〳〵軍戦を好むゝ豊佛者の列ひゝゝべ
ゝんや信長大きゝ武威とゝやゝ〳〵敵石山と責潰んゝ左雑き石
にあゝびとゝへゝも尚今ゝ対〳〵き〳〵砕功労ゝ〳〵る所如ゝ



信長
若江の
城へ
級を

叡慮の強きと恐るべき理不盡のみを聞捨ゐ候てこれあり候信長い
やしくも天下の政をも擬り申候海征伐の大任を預り候とて
も僅か石山の小城ひとつ法師百姓と侮り候とぞ申
何とぞ西海関東の強敵を亡し天下泰平の功を遂んや光佛ら
朝威の落涙仰ぎ奉るべき筋を速に勅定ありて所如の他地へ退去
仕るべき宣命仰せ下されべき条勿論のことも此の叡慮を
叶はせ給ひ候ことをいふぜん信長一世の力を盡し京摂の間の火
を放ち四方三四十里の間の焼土と為し人馬鏑に倒るる悪く
亡し捨ひべし此旨よろしく奏聞仰せ給んで奏
せらるべし抜て俗奏とぞ附の関白殿の御取成
き給ひ急ぎ其旨奏させ給へ当今正親町院も良叡慮と若

め給ひ信長ど奏とる有其いとうるきよりあ〜ど急ぎ石山へ勅
定仰下さるべき旨歎命仰候給へ関白近衛左大臣前久公信長
と近く右と勅定の旨を伝令〜〜と接ぶ延ず所あ内ひらるべ
きうるちづ〜〜家恐せらるべ〜との所事うて即座田大納言を通
御勧修寺中納言晴秀御石山へ下向ありて本願寺へ〜せなもひ
所如と人を対面ありて小田中納寺参来関東及び王城と騒
万民と若〜むるの内門徒の彷徨にあ〜ど速に当山と退き
信長の不審を蕩ぐべ当寺の運如高徳の草創うれど宗旨の
抑ひく退去の後痛〜〜と〜〜ど強て拒と障る
所い宗門破滅の基なるべ〜本願寺へ当地のいぎるべ〜〜ど何
国のもとかを寺と再建〜〜宗門不退転の計ひとをなるべ

信長
参内

世の深く聞奏とりしめ〻る勅使なりしやさる〻所なりと宣え
給人が上人僅でうけ給り勅宣のごく法師の分としく教度
防戒を及ぶる僧侶の為に肖く条恐入くりくも抑我宗
門の法とする所永世に廣く衆生を濟度し匹夫愚婦とて
往生の素懐をとげ長く濁世の名しをのがゝ〻りん弥陀の
誓願なれば出世我宗門を破滅せんと軍馬をしむけ乱
信長こそ佛敵法敵弥陀の利剣と成よいでき信心堅固の
門徒と成る妻子にこそ佛恩に順ふ宗門の奥義をそ以信
長如きの大悪人長く世に蔓〻び寺を焼僧尼を殺〻給ふ
い国去とて妄同地獄に落し〻入〻むべし去まば我国の佛法
敬配給ひ聖徳たるよ法敵守屋大臣と成給ふ法祖と

仰を給ふ孤に出山い聖徳たるの告命を仰せ蓮如上人開山の
霊場なれば不徳の我なりとくども法軍を率て信長と戦
い聖徳たるも旗先に向ひ我軍を助け給ふ況や信長が
暴悪守屋に勝まり勅をうけ給ふ如くとくども今の
戦ひい左僧侶の法をあらく佛法にそむく軍なれば我
とくも善天の下乗去の涙王たるべき所勅命の重
きに恐まを宗門退散るきの評議とは謹ぐ勅答をまるべ
と恭しく安へ給人が両卿も孔如上人の高論に感ぐ給ひ其
旨に任せ給まを執て帰京給ひそう

教如上人英智を素

石山の城中ふはらひ役けざる勅使をとらく孔如上人其家臣

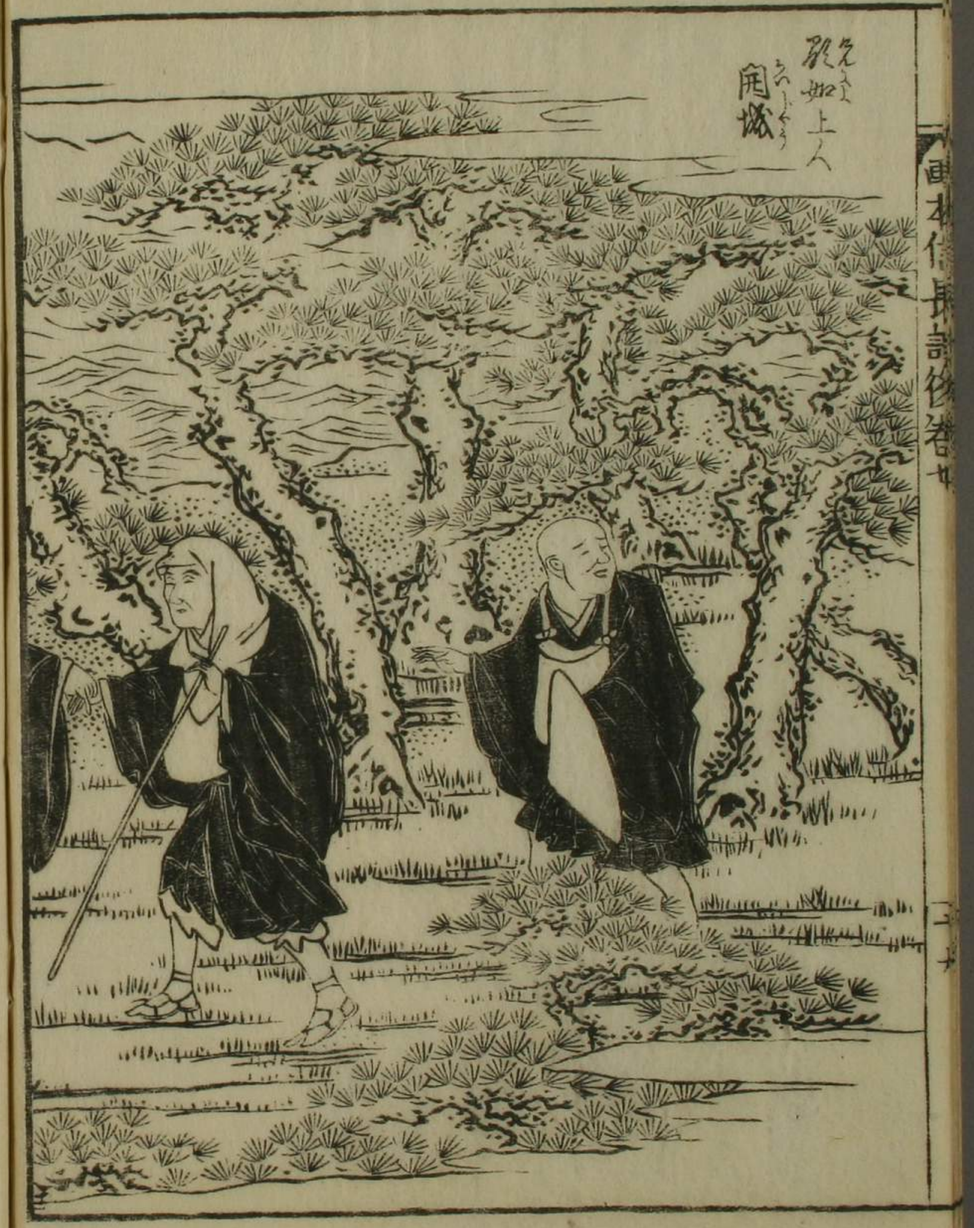
勅使
石山寺

下間業澤摂田爰歩八木平歩名の人々を集められさまざま評
議あり々ふ信長数年合戦を列を失ひ勅命を備て当山を
奪ひ給んと計るゆへんづ〳〵んされども蓍天の下王命をそむ
き給ふ事ゆゑ〳〵に御退去の後勿論なれん紀去しるゞ〳〵信長
い義理実まゝ抜失わ〳〵く先年濃州朝倉の両家と仍て和睦
を図り時と結て忽まち亡せ芸雄の人々れば上人御子を当山の
要害より出し居附を記つて表こうと計るもとるべ〳〵信長
当宗門を御ひく御ゝ遣眼これるき祈願書を面列〳〵禁延の両後
徒人を立せ給ふ上い御退懸ひ〳〵もしるはじくやと一日はやけ
れば上人もこれを日ゞ給ひ信長ゞ祈願紙心えるるあれども
勅命の事きをいふせん〳〵侵傍を以て両卿の御方を右の旨

委〳〵勅答民給ひ〳〵れば禁延ようも此命紀信長へ仰さけ
らる信長候脱ゆ〳〵〳〵石山の地を退去せら〳〵を抑ひて宗門
の儀い勿論上人父子兄弟門下の僧侶小もるまでる細ゆべ〳〵
〳〵即祈願書と御ち面列〳〵て本願寺へ遣らるる先ようて
本願寺より下間法橋教龍同法眼教蔵同少進仲之三人の
祈願書と志〳〵も両卿と差出〳〵開城に月上旬〳〵べ〳〵とて
和睦滞ゆ〳〵相〳〵のひ本願寺はは〳〵退去の用意を
急ゞれ〳〵る紀ゆふ信長心中ゆ尚も上人を眼〳〵懸う紀如
父子退去のゆ勅命の事きゞ紀こいえるゞ〳〵我ゞゞめ石山
の地を不事せ〳〵御遣に退去せば遣眼をあるべ〳〵紀
命い勅命も日来たるべ〳〵去る紀数ケ年の合戦紀軍勢

を換ひ命をうくく彼地を退くほどくや蓑今唯一言の申
よ欲掌くて退き去るい我を偽り誘んどるるものふくさや
ぐくとひそひそとしたりたとひそうふ物訓うる兵士とそくくと
武士の俗よ出立せ上人の城を出て紀州路を通らん途中
うて斬殺せよとくく其用意まちくなり実よ信長の日朋の
人よ為地好河弥とつく者あり先祖より堅固の親密家なり
るが此密謀を実くく大きふ驚きかくて宗門永く退治く
開山聖人の御苦労ひくなりうんと胸押ぐう心強ひて
殺よ法のるして此密謀の決断をたぶくよ石山へ若うなる所
如上人をとぐめ年くせ紀州門下の人くく大きふ驚き信長
のくのごとく内謀ありとつくども表立る使ひ敵対

和睦の儀御受申あげぬるよい今更遠変のものも有りぐくく
さんしいどとく開城せば家命断絶うべ一生の浮沈今此時へと
をのくく立表をぐべし殺人不日に那如上人の御嬌男光寿教如
上人此時御年いまだ三十三歳なるくせ殺人御若年くはやせ
ども天性英才人よ超聰明羅刹よ勝れしるがくく出くく仏なる
い此時何すれて心安くくそなへ又上人い勅命と遠背くく和睦を
破くせ殺人物るくが朝敵の名のがれじ一先紀州雑賀まで御
退去ありて然べし只私よ勝ひくく和使の儀毛頭も御相違な
るきふすう退城のくの不日心の高慢くくて此城よ軍兵くく
る小留りやべし又上人其時仏出立うべきい我和睦くくえのく
不日に彩門不日心なる条言語乱動不覚るしが勅命うるべし


弘法大師
角城

仰あり〻く尚地とひそう小御用きゝ〻し拙らゞ本門い勅命を
重んゞ之退さ給へども彩門不忠不孝ゝく城を崩まう
勅宣なれ陸ひきゝゞといへ共信長我をゝくむる強く恨り
て又上人を憎ゝくゆうきゝゝ信長元より思慮ふうた
大ねるしい彩門籠城ゝて退ゞと云ゞいゝる謀計うたゝんと
あやぶゝ又上人の退き給へ途中まて狼藉あるまじきう
保ゝ証ゝ乱ゝ世の人賜るれば上人い健僧一百人と引ゞ
ひそう小城を出ゝく紀州路の森へ入ゝせ給ひ退城の日より
て御家物だうまと思ゝく引ゝとゝせ給ふゞ上人
途中より信長の伏兵あり共ゝ引ゝとゝ計るものゝゞ何
の恐れとゝ思ひ家光の面ゝ此儀を

同じ給ひさゝゞ其用意せよやゝゝ敢如上人い後より御弟子
三人を召つれ御弟子も健僧の体より出給ひ日月又日石山
の城を出ゝく其夜い奥城の下ゞ方より入ゝせ給ひゝ